

インターフェイス Interface

VOL.

13

2007.6

CONTENTS

- 〈コラボレーション〉社会連携体験記
- 〈コーディネーション〉知的財産マネージャーの紹介
- 〈海外レポート〉産学連携に関わる海外調査レポート
- 〈トピックス〉大和証券寄付講座開講、学生ビジネスアイデアコンテスト2007開催
- 〈インキュベーション〉インキュベーション施設利用者のご紹介
- 〈インフォメーション〉社会連携促進知財本部の新陣容、利益相反ガイドラインの発行



明治大学社会連携促進知財本部

大学と地域の連鎖による産学官連携

—大学の新たな役割として—

この4月より社会連携促進知財本部員に就任いたしました。

地域連携については、これまで、商学部平成17年度現代GP事業「広域連携支援プログラム—千代田区=首都圏 ECM—」およびインキュベーションセンター内起業で行ってきました。ここでの連携の目的は、明治大学が地域と連携し、明治大学が培ってきた知的財産、人的財産を使って社会貢献するだけでなく、同時に地域の力を活用して明治大学をよりいっそう発展させるというフィードバック関係も指しています。

まず前者の現代GP事業においては、首都圏の各自治体と連携し、授業での課外活動を通して大学生が社会貢献を果たすとともに、地域の教育力を活用して大学生を育てることを重視してきました。大学内の授業だけでなく、社会での問題設定、解決までのプロセスを大学生に経験させるにあたり、地域に学生指導の協力を得ながら、現代社会が必要とする人材育成を図ります。商学部では、プロジェクト1から10までの10個のプロジェクトを準備し、各プロジェクトごとに担当の教員を決め、実行してきました。平成17年度、18年度の2カ年の活動については、DVDに動画としてまとめることができましたが、その意義の深さはそのDVDに出演した教員、大学生、地域の人たちの言葉からも読み取れます。その活動は大学と地域との心の連携がなしたわざです。

一方、後者の起業についてですが、まずは昨年4月に、インキュベーションセンターに入居し、5月に株式会社アイ・フォスターという会社を立ち上げました。研究・教育資産だけでなく大学のさまざまな資産を活用し社会貢献を行うには、民間の法人としての立場が必要であったからです。文科系からの立ち上げは、理科系の多い大学のベンチャーの間では稀有のケースでした。

昨年度はこの会社がサポートし、学生に模擬ベンチャー体験を行わせました。具体的には、学生に擬似会社を作らせ、そこで小中学生向けサマースクールの企画、運営を行いました。群馬県嬬恋村には縄文遺跡があり、その勉強をかねてのサマース

社会連携促進知財本部員
商学部教授
水野 勝之



クールを学生たちが企画しました。法人契約を結ばなければならない点などがあるので、アイ・フォスターが事業主体となり、学生たちの模擬ベンチャーはその下請けとしました。もちろん、委託料の形では払えないため、最終的にはアルバイト料という形をとりましたが、活動はベンチャービジネスそのものでした。

この事業での課題は、対象とする小中学生が集まるかどうか、嬬恋村で意味のある体験ができるかどうかでした。前者に関しては、千代田区教育委員会が後援に入り、千代田区内すべての公立小中学校全生徒に案内を配布することで10名以上の子供たちを集めることができました。後者に関しては、嬬恋村役場が仲介し、現地に作られた竪穴式住居に泊まったり、未公開の遺跡をじかに見学できたりと、歴史の勉強としてはこれ以上ない体験をさせられたのではないのでしょうか。ここで成功した重要な要因は、地域連携にほかなりません。明治大学と千代田区教育委員会、明治大学と嬬恋村のそれぞれの心の連携が、大学生の事業をサポートし、小中学生にも教育成果を還元できました。

今あげた現代GPとベンチャー活動は個々の独立したものではありません。連携は連鎖のように幅広い活動を呼び起こします。現代GPがなければ、千代田区や嬬恋村との心の連携は生まれなかったでしょうから、学生の模擬ベンチャー体験もなかったでしょう。

大学が地域と連携することにより次から次に活動の連鎖を生み出します。新たな活動は地域を元気付け、その元気のエネルギーを糧に大学と地域がまた新たな事業を生み出します。この地域活動を連鎖的に発生させるのが大学の新たな役割といっても過言ではありません。私も社会連携促進知財本部の一員として、地域連携を、大学教育にも社会貢献にも有機的に結びつけることができるよう、努めていきたいと考えています。